

山小屋とは？

山小屋の定義

営業小屋と避難小屋に分類される。

営業小屋

有料で食事や寝具が提供されるもの



避難小屋

原則、無人で無料もしくは維持管理費等を支払うことで使用出来るもの。緊急時の使用に限られるもの。



・営業小屋は有料で食事や寝具が提供される。避難小屋は原則、無人で無料もしくは維持管理費等を支払うこと

で使用出来る。緊急時の使用に限られる。

[吉田智彦 (2021) 山小屋クライマックス国立公園の未来に向けて]

・登山者に「営業小屋」と呼ばれる有人（管理者が常駐している）、有償のものと、「避難小屋」と呼ばれる無人（期間限定で有人のケースもある）、無償（協力金などの名目で少額の料金を徴収するケースもある）に大別される。

[大神賢一郎 (2020) 山小屋経営の現状と課題 Sanno University Bulletin Vol. 40]

山小屋の機能

公共性が高い施設である。環境省の資料では山小屋の機能として以下が挙げられている。

「宿泊の提供」「物資の供給（売店・食堂）」「休憩所」「登山者に対する情報提供・安全指導」「給水」「公衆トイレの提供」「医療（診療所）」「救難対策（緊急避難所・救助）」「登山道等の管理・清掃」

[環境省『国立公園』とは？]

<山小屋の機能>

(●は無償、公共的な機能)

- 宿泊の提供
- 物資の供給（売店・食堂）
- ●休憩所
- 登山者に対する情報提供・安全指導
- 給水
- 公衆トイレの提供
- 医療（診療所）
- 救難対策（緊急避難所・救助）
- 登山道等の管理・清掃

宿泊者以外の
登山者につい
ても対象

研究背景

維持・存続が危ぶまれる山小屋が増えている。

社会的要因

a. 山小屋は特殊な立地条件にあり老朽化による建て替えが困難である。

山小屋は特殊な立地条件にあるが建築基準法や消防法、労働法など山小屋に関連する法令は街での生活に照準をあわせており

山小屋ではこれらの法令に遵守することが難しい。また厳しい自然の中で老朽化や破損が激しい。

b. 登山道やトイレの整備について。

現状山小屋事業や国立公園の利用について統括して管理する機関はなく、登山道やトイレの維持管理が山小屋に依存された形になっている。コロナ禍で管理者が誰もいなかった登山道が見つかった。（黒戸尾根）登山道は山小屋のスタッフが整備をしている。資材は市や町が提供してくれるがあとは小屋まかせが多い。しかし営業が出来ない山小屋が増えてくると、これまで登山道を整備してきた人達が居なくなるので荒れてくることとなる。実際に北海道の大雪山では 55.8% の登山道が荒廃したり崩落しても誰も直すことが出来ない。未執行の道が問題になっている。さらに人が居ないと野生動物が多くなるなどの問題も生じる。

c. ヘリコプターによる物資の輸送が難しくなっている。

雲ノ平山荘のホームページには「登山文化の危機！山小屋ヘリコプター問題」というレポートが上がられている。2019年6月末に東邦航空から「ヘリが全て故障したので、当面荷上げはできません」と連絡があったという経緯で書かれたレポートだ。東邦航空は北アルプスの8割方の物資輸送を担っている。その航空会社が人材流出や機体故障により機能不全に陥った。これにより食事を提供できない小屋、燃料が切れかけている小屋、物資が届かない小屋、施設が組み立てられず営業開始が遅れている小屋がある

d. 登山者数の減少。

2009年には1230万人いた登山者数が2018年には680万人に減少している。

自分の要因

筆者は2021年6月～10月、北アルプスの五竜山荘で働いた。その中で山小屋の維持管理の難しさや存在の重要性を感じていた。たとえば、食事を提供することも容易ではない。材料や燃料はヘリコプターで荷揚げをしないといけないし、水は雨水を貯めて塩素消毒をして煮沸をしないといけない。また天候が良くない日が続くと荷揚げもできず、食料が不足する事態となる。

